

「日々の理科」(第 2238 号) 2020, -8, 27

## 「最初のオーロラ (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

北緯 66 度 33 分よりも北側の地域を「北極圏」という。私は研究の仲間と協力して、スウェーデンの北極圏に、日本から遠隔操作できるデジタル一眼レフカメラを設置して、オーロラの観測を行っている。



これはスウェーデンのアルビズヤウルという街から、ノルウェーのボーデという街に向かう国道脇にある標識。「ここから北極圏」という意味だ。北極圏に入っても、急に風景が変わったり、ホッキョクグマが現れたりするということではない。「ここから先は、年間で一日以上、太陽が沈まない日(白夜)がありますよ」という「天文学的な境界線」に過ぎない。



写真はノルウェーのロフォーテン諸島にある「レイネ」という街の夕暮れ。夕暮れといっても深夜の 0 時だ。8 月上旬でも完全には真っ暗にならず、「夕焼け」がそのまま「朝焼け」になってしまう。



その北極圏でも、8 月下旬になると、深夜 0 時を挟んで 1 時間ぐらいは少し暗くなる。星がやっと見える程度の暗さだ。先日の 8 月 19 日、今シーズン初のオーロラを観測した。まだ完全に暮れ切らない北西の空に、淡いオーロラが現れている。



このカメラは、鉄道駅の駅舎に設置してある。写真のような列車が一日一往復だけ停車する。カメラがあるのはこの線路の目の前だ。オーロラ写真の下部に写っている柵のシルエットが、乗降ホームである。



カメラはこの赤い駅舎に、現在 5 台設置されている。北西側は湖、北～東は森で、大きな街からは遠い。ユースホテルも隣接され、オーロラ観測には絶好のロケーションだ。「世界一オーロラがよく見える駅」として、ギネス登録しても良いと思っている。